

「ヨム・キプール」(大贖罪の日)について

宮本 純子

●聖書箇所：レビ記23：26～32

■断食の日

贖罪の日は、ラッパの祭りから10日後の第7月の10日にきます。これが神のカレンダーで最も暗くて最も厳粛で最も恐ろしい日なのです。ユダヤ教で最も聖なる日とされる大贖罪日ヨム・キプールは、約25時間にわたって一切の飲食を絶ってイスラエル民族の罪を神の御前に悔い改める礼拝を行ないます。ですので、この日はイスラエル全土で断食の日で、安息日と同じくどんな仕事もしてはならない日です。この日は、町の中は静まり返っています。そして、ひたすら断食して悔い改めに徹します。

ヨム・キプールのシナゴークでの重要な聖書箇所の一つは、イザヤ書58章1～8節です。5節には「わたしの好む断食、人が身を戒める日は、このようなものだろうか。」とあります。断食は、身を戒めることです。聖書の中には多く見られますが、特に贖罪の日や危機的な時に、神の指示のもとで神の民イスラエル民族は断食して身を戒めました。ヨエル書1：13～14。2：12～14参照。聖書には他にもたくさん断食のことが出ています。エステルもダニエルもエズラもヨナもサムエルも他にも聖書に登場している人物は断食して祈っています。

それは、悪のきずなやくびきのなわめを解き、しいたげられている者たちを自由にするためにユダヤ人たちは断食をするのです。エステルのように絶望の中で、神様への従順さを持って、断食して主を呼び求める時に、神様は神の叫びに答えてくださるのです。

マタイ9：14～15「するとまた、ヨハネの弟子たちが、イエスのところに来てこう言った。『私たちとパリサイ人は断食するのに、なぜ、あなたの弟子たちは断食しないのですか。』イエスは彼らに言われた。『花婿につき添う友だちは、花婿がいっしょにいる間は、どうして悲しんだりできましょう。しかし、花婿が取り去られる時が来ます。そのときには断食します。』」

パリサイ人は週に2度も断食しました。そしてヨハネの弟子たちは、この時ヨハネの死を悲しんで断食したのです。ユダヤ人にとって公認の断食の日は、贖罪の日とプリムの祭りの前日とテシャバブという神殿の崩壊の日の3日間です。

マタイ9：15で、イエス様が言われている「花婿」というのは、イエス様ご自身のことです。付き添う友だちというのは、弟子たちのことです。そして、花婿が取り去られる時、というのはイエス様が捕らえられ、十字架での受難を受けられ、弟子たちから取り去られた後、___天に昇って行かれることについてでした。主の弟子たちが断食をして「身を戒めること」は、イエス様が取り去られてからです。

神様は、ユダヤ人が贖罪の日を守るように命じられました。この日は罪を嘆き、労働をやめて、神に捧げる犠牲を携えて来て、罪赦されおられる日です。もしも守らなければイスラエル民族から断ち切られることとなります。ユダヤ人にとって赦しを受けることのできる3つの方法は、悔い改め(テシュヴァー)、祈り(テフィラー)、慈悲や施し(ツェダカー)で、特に贖罪の日を守らなければならないとされています。

■記憶の書

「贖罪の日」ヨム・キプールの日は、1年で最も聖くて畏れ多い日です。それは、この日に記憶の書に書かれた定めを神様が封印されるからです。先週のローシュハシャナーの新年から10日間は悔い改めの日々でした。罪人の中間の人にとっては贖罪の日にいのちの書に名前が刻まれるかどうかがこの悔い改めの10日間にかかっていますので、死ぬ気になって悔い改めます。そして、この贖罪の日にはユダヤ人たちはシナゴークに行つて「ハティマートバー、どうか私の名前をいのちの書に刻んでください」と、真剣に祈り叫んでいます。

ラビたちは、神に受け入れられるように、生活を直したり、悔い改めることを教えます。もし、悔い改めの10日間、贖罪の日が近づいてくるのに、悔い改めないで、生活を直すことをしなければ、神と人間との関係はもとに戻りません。そうすると神は、命の書からあなたの名前を取り消し、その年のうちにあなたは死ぬ、とラビたちは教えるのです。だから、ユダヤ人たちは、新年から贖罪の日に「いのちの書にあなたの名前が記されますように」

「ハティマートバー」と互いにあいさつを交します。

贖罪の日というのは、やがて来る未来の預言でありひな型です。贖罪の日には、イエスが地上にもどって、全世界の審判のために、地球のすべての民族をエルサレムに集めて大きな審判があるという、預言なのです。

神様は、羊の国と山羊の国に分けられます。ヒツジは歓迎され、祝福され、イエスの王国である千年王国に入って暮らす権利が与えられます。しかし、ヤギは裁かれて地上の千年王国に入ることが許可されません。ヤギたちは命の書から取り消されているからです。来るべき審判の日は、贖罪の日のひな型であり成就です。

■ 悔い改め

悔い改めは、神様との平和を持つ唯一の方法です。悔い改めはヘブライ語で「シュバ、シュバ」と言います。それは「向きを変える」ということです。「立ち止まって、今、あなたが進んでいる方向に行くのをやめて、あなたの神のもとに戻ってきなさい。」ということ。エゼキエル33：11（読む）「わたしは誓って言う。神である主の御告げ。わたしは決して悪者の死を喜ばない。かえって、悪者がその態度を悔い改めて、生きることを喜ぶ。悔い改めよ。悪の道から立ち返れ。イスラエルの家よ。なぜ、あなたがたは死のうとするのか。」この御言葉は、イスラエルに対して悔い改めを言っています。

マタイ3：2「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。」と、バプテスマのヨハネが悔い改めのメッセージを語りました。これは「向きを変えなさい。あなたがたの心と思いを神に再び向けなさい。救いを与えるユダヤ人の王でありメシアが来られるからである。」と語っているのです。そして、マタイ4：17でイエス様も宣教を開始した時に同じことを言われています。ユダヤ人も異邦人もすべての人が神様に立ち返らなければ赦されることは出来ない。そして、すべての国民は罪を悔い改めてイエス・キリストを信じなければ救われないのです。

■ キプールとは、覆うこと。

ヨム・キプールのヨムは「日」のこと、キプールとは「覆う」とか「覆い」というヘブライ語です。ですので「覆いつくす日」という意味です。「私の罪を覆ってください。」ということ。聖書でキプールが初めて出てくるのは、ノアの箱舟です。箱舟は密封されただけでなく、守られたのです。

贖いによって、悔い改めた人の罪は覆われ、神様の目から隠されました。そして刑罰から守られたのです。

神の規定によるとイスラエルの大祭司だけが、民のための「贖いをする」ことが出来ました。ですので、贖罪の日における大祭司の清めは、まずミクベという洗礼層で5回身を清めます。両手両足は10回ずつ洗い清めます。

■ 幕屋と神殿時代・レビ記16章

幕屋と神殿のあった時代には、年に一度のこの贖罪日に大祭司が供え物といけにえと二匹の雄山羊とを献げました。大祭司は、まず毎日行われる朝の犠牲を自ら献げ、香をたき、燭台（メノラー）に火を灯します。それから大祭司用の黄金の法衣を脱いで、白い衣に着替え、用意された犠牲用の若い雄牛の頭に手を置いて、まず自分自身と親族の罪の告白をし、この中で三度神の名を唱え、ひれ伏して「御名に祝福あれ、御国が永遠に栄えますように。」と唱えました。そして、二匹の雄山羊を用意し、大祭司はくじによって、一匹を主のために、もう一匹をアザゼルのために選び、再び雄牛の頭に手を置いて、二度目の罪の告白、「アロンの子たち、聖なる部族の罪」の告白を行ない、そして雄牛をほふり、その血を器に集めて、それを携えて至聖所に入り、その血を振りまきました。主のために選ばれた雄山羊も雄牛と同じように犠牲にして献げました。

実は、大祭司はこの血を縦と横に十字架の形を作るように振りかけることになっていたのです！
このことは、十字架によって血を流される到来するメシアの預言だったのです。

一方、アザゼルのための山羊は人々の罪を一身に背負わされて荒野へ追い出されます。
レビ16：21～22（読む）。「身代わりの山羊」（スケープゴート）という言葉は、ここからきています。身代わりの山羊に罪を移す儀式も大祭司が行ないます。大祭司は山羊に近づいてその上に手を置いて三度目の罪の告白である「イスラエル民族」のすべての罪の告白をしました。イスラエル民族の罪を一身に背負わされた山羊は、神殿の出入口に移され、祭司やレビ人に伴われて町の外に連れて行かれて、険しい崖から突き落とされました。戻ってくる可能性があったので、山羊を殺しました。以上の儀式を終えてから大祭司は再び大祭司用の法衣に着替えて、残りの礼拝を勤めました。これが幕屋、神殿時代のヨム・キプールの儀式です。

■カパロット

幕屋も神殿もない現在では、正統派のユダヤ教徒がニワトリを犠牲にする「カパロット」という儀式を行っています。一人一人に一羽の鶏を用意し、鶏の足を縛って手に持って頭のまわりを回します。この時に「これは私の身代わりです。この鶏は死にますが、私は生き長らえますように」と祈ります。

■サマリヤ人

そして、現在でも羊をいけにえとしてささげている人たちがいます。それはゲジリム山のふもとで生活しているサマリヤ人たちです。サマリヤ人たちは今でも羊をいけにえとしてささげています。

■大祭司イエス

ヘブライ人への手紙7：21～27

神殿時代は、大祭司がいけにえを献げなければなりませんでしたが、しかし、いくらいけにえやスケープゴートに罪を身代わりに背負わせて主に献げても、またすぐに人は罪を犯してしまいます。そうなるらと一体、何匹のいけにえに血を流してもらわなければいけないのでしょうか？

罪のない、聖い、神の小羊なるイエスがたった一度だけ、十字架の上で全人類の罪の身代わりとなられ、血を流してくださったのです。ですので、私たちはもういけにえをささげなくても、イエス様を信じるだけでいいのです。このことを、ヨム・キプールの贖いの日の度に、神様に感謝しようではありませんか。

■贖いの血

人類は罪深いので、魂のための贖い主が必要なのです。

レビ記16：30～32。

律法が与えられる前から、神様はいけにえをささげるように命じておられました。

神は、神に近づく唯一の方法として血を定められました。アダムとエバが神との約束を破った後、神ご自身が動物をほふり、その血を流し、皮の衣をつくり、アダムとエバという罪人を覆ってくださったのです。

彼らは犠牲の血を流すことにより、その罪が覆われたのです。ですから、アダムとエバはカインとアベルに、血のいけにえによって神に近づくということを教えました。

カインとアベルは、いけにえのささげものをささげましたが、神様はどちらを選ばれましたか？

カインの地の作物の野菜ではなく、アベルの羊の初子の中の最良のものでした。

そして、過越しの祭りでも学びましたが、神様が過ぎ越された家のかもいには小羊の血が振りかけられました。過越しにも犠牲のいけにえの血が流されました。

レビ17：11「なぜなら、肉のいのちは血の中にあるからである。わたしはあなたがたのいのちを祭壇の上で贖うために、これをあなたがたに与えた。いのちとして贖いをするのは血である。」

罪を贖うのは犠牲的な血であり、魂を贖うために神様は、いのちであるご自分の血をお与えになると言われているのです。これは、メシアの預言なのです。

イエス様は潔白であり、罪のない者でありながら、私たちの罪を贖うために、十字架の祭壇の上で全人類の罪の身代わりとなられてご自分のいのちをささげ、神ご自身が、御子の人格にあってご自身の尊い血をささげて流してくださったのです。

ヘブル9：11～15。9：18～28。10：11～12

イエス様を信じるならば、私たちは永遠の贖罪日があり、神から切り離されることはないのです。神はメシアであるイエス様を私たちの贖いとして、罪の赦しとして送られたのです。もはや、罪の赦しを得るために贖罪の日にいけにえや鶏をささげる必要はないのです。イスラエルのメシアであり、全世界の救い主である神の小羊の血潮によるものです。

いけにえをささげることは、イザヤ書53章からも見ます。

苦難の救い主としての偉大ないけにえは、全人類の罪の贖いとして、カルバリで尊い血潮を流されたイエスの御人格であって、すでに成就されたのです。

ユダヤ人だけでなく、異邦人も罪の赦しを得、罪が覆われる日を守り、仕事を休み、身を戒めるように神様は定められました。この重要な日は、血を流すことを通して守られるのです。

ヘブル9：22「血を注ぎ出すことがなければ、罪の赦しはない。」

■まとめ

二千年前に、カルバリ山の祭壇の上で成就した贖罪の日は、地の基の置かれる前に、神の御思いの中に、ユダヤ人と異邦人、全人類のためにありました。神の救いを受け入れた私たちは、主を賛美して「イエス様は私の贖い主です。」と宣言しましょう。

私たちの素晴らしい救い主は、ご自分をいけにえにされました。イエス様を信じるだけで、私たちの名前は「いのちの書」に記されるのです。

私たちは決して主から切り離されることはありません。毎年1回、贖罪の日に、罪の許しのために、いけにえの血を流す必要はもはやないのです。なぜならば、神の小羊なるイエス様がすべての人のために、ただ一度、尊い血を流されたからです。イエスを信じるユダヤ人、メシアニック・ジューも異邦人クリスチャンも生ける神の御子イエスの完全ないけにえによって、今もこれからも永遠にヨム・キプール、罪が覆われる日を持つことができるのです。このことを神様に心から感謝しましょう。

